



# 楷

## 岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY  
LIBRARY BULLETIN

No. 19

1994  
APRIL

# 教育研究体制の大改革と 中央図書館増改築

学 長 小 坂 二 度 見

現在、岡山大学では教育研究体制の大改革が行われておりますが、昨年6月学長就任以来、この改革に鋭意努力しているところであります。現在多くの問題を抱えております。

岡山大学で直ちに取り組まなければならない重要事項の一つに、中央図書館の増改築があります。中央図書館増改築問題は、昭和61年7月に学長を委員長とする岡山大学新中央図書館建設企画委員会が組織され、情報化時代にふさわしい本学中央図書館の今後のあり方について審議検討されております。

また、昨年には岡山大学自己評価委員会学生専門委員会が『岡山大学における学生生活の現状と問題点—学生生活・健康管理・図書館・留学生—』をまとめ公刊しております。その報告にもありますように、岡山大学における教育・研究上、図書館施設の整備充実は最も緊急を要する事項であります。

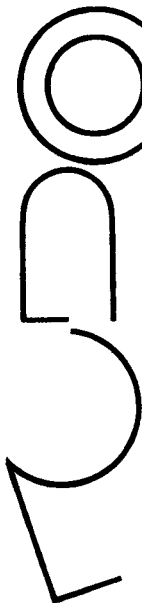
### 1 学習・研究図書館機能の整備

\*

岡山大学は全図書蔵書冊数約160万冊で、全国国立大学では12位という高い水準にあり、中央図書館扱いの図書約115万冊のうち中央館に收藏されて学生が直接利用できる「図書館備付図書」は約70万冊で、他の約45万冊の図書は各研究室に收藏されています。

これらの「研究室備付図書」は、資料の利用形態の種別もありますが、附属図書館の收藏スペースに余裕がないため、やむなく研究室備付図書になっている場合もあります。

一方図書館では、蔵書の増加で利用空間まで圧迫され、利用者にとって快適な環境とは程遠いばかりか、一方では蔵書構成も貧弱で魅力の乏しいものになっており、その充実が一日も早く実現される必要があります。また、大学図書館の利用環境におけるアメニティ（ゆとり）も充分考慮されなければなりません。



## 2 ニューメディア化への対応 \*

情報社会の進展、学術情報量の増大、学際的学問領域の増加など、学習・教育・研究活動を取り巻く急激な環境変化に対応するため、図書館の設備・資料等の近代化が必要です。

コンピュータの普及やメディアの多様化の進展、学術情報システム・オンラインネットワークの整備、カードレス・オンライン情報検索の普及、AVスペースの充実、マイクロ資料の保存等への配慮、さらに21世紀へ向けて、最近の図書館をめぐる情報化等の急速な進展や新しいニーズの高まりに応えるため、学術情報センターとしての機能が要請されています。

そのため毎年教育・研究の活性化経費を学内措置して有効活用を図っているところでありますが、特に平成5年度はCD-ROMサーバシステムを予算化しました。これは従来、館内でスタンドアロンのパソコンで提供されていたMEDLINEなどの有力索引・抄録誌のオンディスクソフト5種類を、学内LANを介してオンラインで学内にサービス提供するシステムで、平成6年度にスタートする予定です。これにより自然系・人文社会系ともに、研究室において学術情報のより迅速、的確な検索が可能になります。

## 3 留学生受入れへの対応 \*

本学での留学生の受入れは300人を越えており、文部省が推進しています「留学生受入れ10万人計画」と歩調を合わせる形で増加しています。今後さらに増加する留学生の勉学・研究活動を積極的に支援する役割が図書館にも課せられております。

そこで、留学生の皆さんが図書館に期待されている要望等をできるかぎり増改築の中に活かし、留学生コーナーを設けるなど、図書館利用のうえで、国際交流の一助を果たしていくことを考慮しています。

## 4 地域社会への公開 \*

岡山大学の構成員のサービスのみならず、生涯学習の場としての大学の公開があります。開

かれた大学の一翼を担う中央図書館は、この問題についても柔軟に対応する必要があります。岡山大学附属図書館が所蔵する一般学術書の利用だけでなく、貴重資料の展示など機会を見つけて地域住民に公開する必要もあります。

## 5 資料の保存 \*

附属図書館には池田家文庫を始めとする、多くの貴重資料を所蔵しております。これらの保存のためには特別の配慮が必要です。また、増加し続ける図書・雑誌資料の保存、多種多様な形態のニューメディア資料の保存にも、利用者に不便をかけない配慮が必要となります。

特に、資料の有効活用のためには研究資料を含めた配置場所について、学内における調整が必要と思われます。関係各位のご理解とご協力をお願いいたします。

以上、新しい図書館に望まれる機能を列挙しましたが、その基盤とも言うべき増築の早期実現に向けて努力しているところです。

周知のごとく、津島地区は埋蔵遺跡があり、附属図書館の増築にあたっては、事前の調査が必要になります。幸いにも、文部省をはじめ関係各方面、とりわけ本学埋蔵文化財研究センターの格段のご理解・ご協力を得ることができ、平成5年度末から増築予定敷地内の遺跡の発掘調査が開始されております。

定員等の面でも厳しい状況下にあります。増改築に当たっては、図書館としても学生・研究者にとってより利用しやすい、また研究面に関しても最新の学術情報の発信基地と呼ぶに相応しい図書館とはどのようなものであるかをよく研究して、すばらしい建物の実現計画に努めていただきたいと思います。平成7年度には概算要求により、増築の早期実現に向けてさらに努力する所存であります。

また、広義の利用環境の整備・改善という意味から、夜間開館時間の延長等についても、全学の問題として取り組んでいく所存です。

(こさか・ふたみ)

## 図書館の収書問題をめぐって ―鼎談と寄稿―

出席者 神 立 春 樹  
藤 本 喬 雄  
田 中 基 之  
進行中 野 美智子 (編集部)

本誌でこのテーマへの取り組みをはじめたのは、No.10 (1990.2) の特集「選書 収集 コレクション構築」においてです。

その後3年を経過した昨年春、神立春樹教授はNo.10の特集に寄せられた記事をベースに、論文「岡山大学附属図書館における収書の在り方」を発表されました(岡山大学経済学会雑誌 第24巻4号)。また、岡山大学自己評価委員会の編集による『岡山大学における学生生活の現状と問題点』が刊行され、第Ⅲ章で図書館が取り上げられました。その取りまとめは田中基之教授です。いずれにも問題点の指摘と改善提案がなされています。

本号では、これらの提言を踏まえて、現時点における中央図書館の収書の現状と課題について再び特集を企画することにしました。今回は教官の方々にユーザとしての立場から、ご発言をお願いしました。

前半の記事は、これまでの本誌における収書問題の取組みと現状を紹介し、経済学部神立春樹・藤本喬雄教授、理学部田中基之教授に鼎談をお願いし、新たな改善策を探っていただいたもので、当日(1月28日)の発言をもとに広報委員会が取りまとめたものです。

また、後半は6人の教官の方々に収書問題をテーマにご執筆をお願いしました。

### 中央図書館の収書のあり方 \*

#### 一'90 図書館からの提案一

私たちは、大学の中央図書館としての収書は

(1) どのような資料を、どの程度収集すればよ

いか、  
(2) 資料収集のシステムをどのようにすればよいか、  
この2点を課題としています。

大学の中央図書館は、その果たすべき機能のうえから、学習図書館と研究図書館としての収書が必要ですが、本学図書館は、研究図書館としての蔵書が弱体で、これを改善するためには研究者の研究活動と図書館の研究図書館機能とを明確にする必要があります。

大学において、研究者の研究活動を支える資料は、個々の教官によって選定され、研究室に配置される資料群(一次、二次資料)と、図書館に配置される資料群とに分けられます。

この場合、図書館には、一教官あるいは一学部単位では購入できない高額資料を配置し、研究者の共同利用に供するならば、図書館にとっては、研究に結びつく質の高い研究資料を集約的に収集することが可能となり、教官にとっては、研究費の効果的運用ともなり、学内の資源共有、有効利用が促進されるはずです。

二次資料(参考図書)についても同じく、中央図書館には、研究分野を援助する共同利用の可能な、例えば全世界の言語辞書類、書誌、百科事典等を核に、質量ともに有用なコレクションを構築することが肝要です。

『楳』No.10において当時の矢野事務部長が提案した改善事項は次のようです。

- (1) 中央図書館の収集すべき資料は、学習用資料、高額図書資料(研究者共同利用)、参考図書である。
- (2) 参考図書の整備充実は図書館員の責務であ

る。

- (3) 本学図書館に資料収集問題を専門に取り扱う委員会を設け、新たな選書ポリシーを作り、それに添った資料を選ぶ必要がある。
- (4) 選書における職員の役割は、何があって、何がないのか、ユーザは何を求めているか、何が利用され、利用されていないか、さらには出版情報など選書に必要な情報の提供である。
- (5) 取書には、予算の有効活用と素早い対応による確実な入手と必要な財源確保の問題があり、事務側の組織的努力が必要である。

### 図書館資料費について

\*

#### —課題と対策—

経済学部の中立春樹教授は、岡山大学の取書問題における改善は、なによりも、次の3点を検討し、図書資料購入費の有効使用を図ることであると指摘しています（『楷』No.10及び前記論文）。

- (1) 文部省の配当経費の計画的・有効的使用  
文部省からの配当経費の組み替えによる教官選定が限りなく細分化され、図書の購入が個別的選択に任されている。
- (2) 全学レベルの研究費の有効的实施  
自然科学系外国雑誌の共同利用のように、学部の枠をこえた共通費の設定、共同購入により、大型の基本研究資料の収集を追求する。
- (3) 学部、部局レベルの研究費の有効的实施  
経済学部、法学部などで実施している方式として、学部などの部局で共通の図書充実費を設け、個人配分研究費では購入できない大型の基本資料の購入に当てる。

### 改善への施策

\*

#### —図書館資料整備5カ年計画—

No.10における改善提案は、平成2～6年度の5カ年計画において、資料費の配分改善に反映されることになりました。当時の定兼館長は、

『楷』No.12で次のように改善点を明らかにしました。

- (1) 附属図書館備付の学生用図書教官選定依頼のうち、形骸化の見られる指定図書を一般図書に含めて資料費の有効利用を図った。
- (2) 新費目として、ニューメディア資料（CD-ROM等）、AV資料、外国人留学生用資料を新設、特に高額化する冊子体参考図書（主として二次資料）に変えて、検索等がより便利なCD-ROMを重視した。
- (3) 学内措置費の半額を全学共用図書（高額図書）に配分して倍増し、その一部を近年教官負担が過重になっている共同利用自然科学系外国雑誌費にあてた。
- (4) 鹿田分館にも全学共用図書を配置した。

### 学内措置額について

\*

文部省配布の経常的な図書購入費予算は平成4年度2,560万円余で、年々あまり増えていません。それに学内措置費を加えて予算を組み替えたうえ、附属図書館選択委員会用190万円（一般・参考図書）、学生希望図書90万円（一般・参考図書）、ニューメディア資料（CD-ROM）150万円、AV資料40万円、留学生用資料25万円を除いて、各学部、研究室に選書を依頼しています。

学内措置額は関係部局の教官当積算校費、学生当積算校費控除分（いわゆる学部等からの持ち出し分）で、岡山大学でも関係部局の理解を得て平成2年度から図書館整備5カ年計画として300万円を増やし、従来の約2倍弱に拡大されました。この学内措置の配分による全学共用図書（平成4年度230万円）は、人文社会系学部と自然科学系学部が複数部局で利用する資料を購入するものです。

経済学部の坂本忠次教授は、『楷』No.15で同計画終了後はさらに新たな措置が必要であり、本学とはほぼ同規模の他の国立大学に比べても、本学の学内措置額は十分といえるものではないことを指摘しました。

# 蔵書の現状はミゼラブル

—'93 鼎談からの提案—

## 活きた資料は研究室にある

\*

本学はA規模大学（8学部以上）に入り蔵書はそれなりの量をもっていますが、問題はその質です。質とは資料が活きているかどうかということで、それは必ずしも利用頻度が高いということだけではないと思います。自然科学の研究では学術雑誌が主体になりますが、文科系の場合には古い資料も重要で、活きた資料の意味は分野によって違って来るものと思われま

す。データの調査では、蔵書数は津島地区115万冊、そのうち70万冊が中央図書館、45万冊が研究室にあります。ところが年間の図書費は、図書館が3千万円、研究室はその10倍の3億円で、新しい役にたつ図書の大部分は研究室備付のものということになります。図書館の3千万円という額は非常に少ないのに、それを公平にということですらに細かく分けて使っているわけで、これでは質的に良い資料は、中央図書館では得られにくいと思います。

研究室備付資料は現場で教官が選び、自分のまわりに置いて使うものですから、研究資料として活きた資料であることは当然です。

そうすると、中央図書館で活きた資料とは何かということを考える必要があります。

自然科学系では、専門性の高い資料は研究室に共用性の高い資料は中央図書館にという考え方で、研究資料として共用性が高い外国学術雑誌を中央図書館に共同利用コーナーを設けて提供しています。しかし、その購入費用の大部分は教官が研究費で負担しており、30~40万円というかなり高額を負担をしている教官もいるのが現状です。

## 研究室資料を使いやすくするために

\*

### —OPACの改善を—

問題は研究室の資料を研究室以外の利用者に使いやすくするために、中央図書館が中心にな

ってサービス体系を整備する必要があるということです。現在のOPACは割合使いにくい。特に配架場所は7~8桁の数字で表示され、誰が買ったかという情報も学科名で表示されているので、自分が使いたい文献の配架場所が分かりにくい。学生からもこのような苦情をよく聞かれます。検索した時にどこへ行けば良いかははっきりわかるようにするなど、もっと使いやすいシステムを考える必要があります。

## 中央図書館に何をおくべきか

\*

人文社会科学と自然科学ではずいぶん異なりますが、人文社会科学でも最先端に行く分野と歴史的な分野とでは資料の性格も量も異なってきます。特に古い時代を扱う分野では個々の研究室では置ききれないような量になり、大きな書庫でなければ納まらない、置ききれないと同時に、置いていても意味がなく、必然的にどこかに集中して共同利用に供する必要がでてきます。

研究室の図書が増えて、どこか一カ所にまとめたほうがよい、例えば中央図書館に集めるとしたときに、中央図書館の資料を活きた資料とするためには、中央図書館は倉庫ではないのですから、どういうものをもって来るかを質的な面から考える必要があります。

スペースがなくなったから中央館に集めるといふのでは、不要なものを置くことにほかなりません。実際にはそれとは逆に、中央館にいいものを置く、という発想でなければだめです。そのためには、図書館に全学的に集中された予算で購入しないとそうはならないでしょう。

人文社会科学系の場合は、学生の使う資料と教官が使う研究資料の区別がはっきりしていない分野もあると思いますが、自然科学の分野ではこの点は比較的にはっきりしています。

従って、中央図書館に何を集めたらよいかという問題は考えやすいと思います。自然科学の



分野では、学習資料や二次資料の質を高め、充実することはそれほどむずかしい問題ではありません。もっとも、これらの資料は今後ニューメディア化が一段と進展するでしょうが、

大切なのは研究資料をどうするかということで、岡山大学が大学院大学をめざすのであれば中央図書館は研究図書館としての機能を増やしていかなければなりません。自然科学の場合、中央図書館で活きる資料は学術雑誌であり、共用できるものはなるべく中央図書館に集めることが必要です。その他に大型コレクション、高額資料などがありますが、それらは何年か経てば極端に利用価値がなくなります。

基本的な研究資料である学術雑誌は中央図書館に、その他の専門書、専門的な雑誌は現場、つまり研究室の近くに置いて使うのが研究資料として活きる使い方だと思います。ただ大学全体としてそれらが使いやすいサービスシステムをきちんとすることが大切です。

#### **本学の研究費が多いのはなぜか** \*

よその大学からきた当座、岡山大学は研究費が多いので喜んでいましたが、それはなぜかという、他の大学では、全学予算の配分のさいに図書館にもっと費用をさいていたわけです。

#### **中央図書館に重要雑誌の集中配架を** \*

例えば中央館に大ホールを作り重要雑誌を研究費を出し合って集めます。教員一人平均10万円を出し合うと、1億円の図書費の基盤ができることとなります。5カ年計画で研究費を拠出して、重要雑誌の集中配架を図るという構想はどうでしょうか。そしてそこに行けば必ず見たい雑誌があるというようにしてみたい。そのためには予算の流れを変えていく必要があると思います。

#### **図書館は先人のアイデアの宝庫** \*

最先端の分野では、研究情報は専門雑誌に頼らないで、研究者間の情報交換など、自分の研

究室で事足りるとも言えます。むしろ古いもの、研究室ではでくわさないものを図書館に求めて新しいアイデアを得ることもあります。

#### **学生用図書の質をよくするためには \*** **学部を越えた調整機能が必要**

自然科学の場合は、テキストも割合限られており、学生は図書館の図書で間に合っているようです。しかし、その質をもっとよくするためには選定の仕方を工夫する必要があります。

現状は、学生用図書の選定依頼が学部に来ると機械的に学科に分け、更に教官あたりに分けてしまいます。公平かもしれませんが調整する機会がなくなります。どこかで調整をやればもっと有効に使えるはずですが、分野によっては複数の学部学生に利用される図書も多いはずですが、選書の全体的な調整はなされていません。学部を越えた分野別の調整も必要です。

例えば、分野別のリストを図書館で作ってもらい、それを何人かの教官がチェックする、そういう作業も必要ではないでしょうか。

#### **図書館員に選書をサポートしてもらえるか\***

そのような選書の基本的なガイドラインを図書館員が担当することについて、教官側がそれに応ずるかどうかという問題がありますが、今の段階では解決できる問題だと思います。現在のように教員の教育・研究それ自体の負担が非常に大きくなってきますと、いわゆるマネジメントができなくなってきています。入試の回数も多く、それ以外に委員会も複雑化しており、むしろ図書館員に可能な限りサポートしてもらいたいという気持ちが強いです。

実際問題として、選書において図書館側が分野別のリストを作るなどの余裕があるかどうかということでしょう。

#### **図書館員にもっと専門性の発揮を** \*

人の面では、岡山大学と同規模の蔵書数をも

つ他大学と比較すると、本学は人数的には非常に劣悪な状態であり、専任の配置が少ないという問題があります。これは発足時の定員の配置の問題に起因しているもので、簡単には解決できないし、これからもますます定員削減という厳しい状況が起こってくるでしょう。一方では、いろいろと新しい知識や技術を身につけなければなりません。そういう状況の中で、図書館員に果たして上述のようなことが具体的にできるかどうかという問題が、むしろ私たち教員としては関心のあることなのです。

教員の立場からみると、サポートしてもらわなければならないことは、たくさんあって、どこかでサポートしてもらいたいです。

経済学部では個別購入をできるだけ押さえて共通費を増やし、中型コレクションを充実させる努力をしています。この方式が全学的になっていくとよいと思います。

個々の教員が個別に購入することの問題についていうと、絶えず繰り返されていることなのですが、重複購入をしないようにしようとする、誰かがチェックしなければならないわけです。そのためには人が必要で、共通費でアルバイトを採用してやってもらう費用と重複購入のムダとを考え合わせると、どうしても後者のほうがいいということになってしまいます。

学習図書、教官選定図書の問題で、限りなく購入費が細分化される問題と、学部を越えた分野別の調整の問題を解決する方法として、図書館員にサポートしてもらおう体制をつくり、その専門性を発揮してもらいたいと思います。

この点について、教員の側から対応することはむずかしいことではないと思います。

#### OPACに遡及入力

\*

OPACに目録データを遡及入力していくことができるようにすることが必要です。そうすれば、学生用図書の改善・充実の基礎資料としていくことができ、分野別の資料リストを作ったり、本の配置換え、買い替えのチェックも可能になると思います。

#### 図書館員に参考図書の選択を

\*

参考図書は、図書館員の専門領域ですが、本学では『楷』No.16の「参考調査業務の新しい展開」に述べているように、参考図書の選書に図書館員は加わっていません。図書館員の選書は選択委員会用のみです。しかも、教官選定分は細分化を余儀なくされています。平成6年度から中央図書館にCD-ROMサーバーが新設され、利用度の高いMEDLINEなどの有力索引誌・抄録誌のCD-ROMが学内LANを通して提供される予定ですが、これらは毎年約170万円の継続購入費が必要です。すでにニューメディア費では不足して、関係部局の共同購入によっているものがあります。

この参考図書購入費も、共通費的な考え方で運用するならば、中央図書館に質の高い大型、高額な参考図書（ニューメディアを含む）を収集することができ、しかも図書館員が本学の図書館の蔵書の形成に参加する道も開けます。

#### 図書館から収書、選書組織の改善提案を

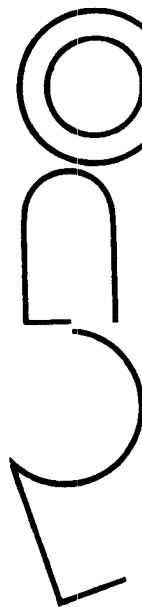
\*

教員はよりよい図書館のあり方をみんな願っていますが、忙しい中でどのようにすればよいか踏み出せないでいるのが実情です。図書館から具体的な改善のアイデアを考え、提案することが重要だと思います。例えば、図書の購入費目を現状より大分けにして、学習図書、参考図書、研究資料程度にし、重点的な収書方針を立てることなどが考えられましょう。

#### — 学術審議会報告から —

この2月に学術審議会から出された『大学図書館機能の強化・高度化の推進について』においても、図書館資料収集のガイドラインが示されました。そこでは、さらに一歩進んで、中央館が大学全体の収集計画策定の中心的機能と全学的調整機能を果たすこと、長期展望に基づいた特色あるコレクションを形成するための組織的な選書体制をもつことが強調されています。

(文責・中野)



# 図書整備理念の再検討

—一律・均等から個別・集中の原則へ—

北神正行

学生用図書は、いうまでもなく学生の教育・研究に必要な学習資料であり、その整備拡充は当然、大学全体の使命としてその質的な側面と量的な側面での対応を同時に進めなければならないものである。しかし、そこには検討すべき課題が存在することも事実である。

現在、学生用図書購入の主たるものとして学生用図書、参考図書経費が各学部等に一律・均等の原則のもとで配分されている。その結果、図書の選定については各学部や個々の教官の要望が反映され、専門性や特殊性などが加味された体制が取られている。しかし、その反面、限られた資料費が一層細分化されることから複数の分野に関わるような大型の学習資料や系統的に収集する必要のある資料が選定の対象から漏れてしまうという問題が生じている。

確かに、一律・均等という原則は、学部・教官等の専門性や特殊性への配慮という側面でのメリットは認められるが、全学を対象とした授業・学習資料面での対応にはデメリットの側面も有している。特に、私の所属学部である教育学部、その中でも全学の教職専門科目への対応という観点からは、専門性を基礎としながらも、より幅広い観点に立った学習資料の収集・整備も求められるのである。その点で、リソース・センターとしての附属図書館への役割期待が大きいのである。しかし、限られた経費でしかも細分化された予算の中では、それへの対応は非常に難しいという現実も存在している。

そうした観点に立った場合、別の観点からのアプローチが必要になるのではないだろうか。

すなわち、一律・均等の原則を基礎としながらも、そこに個別・集中の原則を加味することによって、学生の学習用資料の質的・量的充実を図るというものである。特に、学術研究の進展は、その分野の一層の専門分化と同時に学際

的にもなるという今日的狀況を考えれば、それに対応した学習資料の質的整備は、新たな理念のもとでの対応が必要になるのではないだろうか。

今日、情報センター、メディア・センター、そしてリソース・センターとしての役割が期待されている附属図書館が、その役割を十分に発揮していくためには、その所蔵する図書資料等の質・量両面での整備拡充を計画的に進めていかなければならない。そのためには、図書資料等の整備計画の理念の見直しも必要になると考えられる。

こうした図書整備にあたっての理念を見直す問題は、学習資料の有効活用という観点からも提起されることである。

現在、図書等の資料の年間購入経費の91.8%は研究室備付資料の購入に充てられ、附属図書館備付資料の購入費は、わずか8.2%という状況にある。その結果、附属図書館に備え付けられている図書の半数以上が10年以前までに購入されたものであるという状況を生んでいる。

これでは、学術研究の進展が急激な今日、学生の教育指導において十分な対応ができないばかりか、学生の自主的な学習・研究活動にも大きな支障をきたしていることは想像に難くない。

確かに、我々の立場から言えば、自分の研究や教育の必要性から選定購入した図書・資料等は、その専門性という点から利用価値も高く、また研究室という最も身近な場所に配架されていることは、研究室の学生にとっても便利であるという教育・研究上の利便性は高い。しかし、学生の教育指導、特に全学の教員免許状取得希望者を対象にした教育指導という点では、問題も大きいのである。

こうした点から考えれば、附属図書館備付資料に関わる購入経費の見直しを進めることと併せて、研究室備付資料の活用のあり方も検討されるべきであろう。それによって、附属図書館が名実ともにリソース・センターとして機能していくために必要な基礎的条件を確保、拡充することが可能となるのではないだろうか。

(きたがみ・まさゆき 教育学部助教授)



# 学生用専門図書の 収集の在り方について

神山 敏雄

## 1 はじめに

『楷』の編集部から学生用図書の問題について何か一言といわれ、これまで深く考えたことのない筆者にとってはお門違いではないかと困惑したが、日頃の怠慢の罪滅ぼしのつもりで執筆を引き受けた。ここでは学生用の専門図書の収集の在り方について若干検討してみたい。

## 2 学生用専門図書の収集方法の現状と問題点

法学部では、共通の専門雑誌や判例集などは、学部レベルで積算校費（すなわち研究費）から差し引いた共通費を設けて計画的に収集し、また、各プロパーの専門雑誌も各教官の研究費でもって継続購入しているのだから、比較的に問題は少ない。問題なのは、学部内のそれぞれの専門分野における専門図書の購入である。ここでいう専門図書は、教科書レベルのものからコンメンタール、講座もの、モノグラフィーの類にまで及ぶ。図書資料費の予算は、文部省からの図書館への配当費と研究費である。学生用の専門図書を購入するには、図書館から毎年、学生用図書選定依頼のある一律2万円内の図書費と教官が自己の研究費から任意に支出する額が主な財源となる。図書館では、学生の要望にしたがって独自に購入する場合もあるが、それには限りがある。それぞれの専門分野では、研究者数や専門書の出版量も異なるので、教官一人当たりの一律配分は専門分野ごとの収集の度合にばらつきをもたらす。筆者の経験からすると、その年に発刊される和書の教科書やモノグラフィーなどを4、5冊買えば、学生用図書費は吹っ飛んでしまい、他に購入したい多くの専門図書は見送らざるを得ない。結局、毎年、購入されない基本専門図書は累積される結果になる。

（教官は著者から贈呈を受けたり、必要な文献は自腹あるいは研究費で購入し、研究室に備え

付けるのでそれほど不便はないであろう。）結局、図書館に配架する学生用の専門図書を購入するには、研究費を使う以外にない。しかし、私などは、それに回すのも僅かであり、研究費のほとんどは自己の研究に必要な洋書購入に投入し、それでも赤字の繰り越しをしている状態である。教官の中には、自己の研究費から計画的に学生向けの専門書を購入し、図書館に備え付けている方もおられるかも知れない。しかし、現在のシステムの下では、このような方針をすべての教官に期待することは困難であろう。

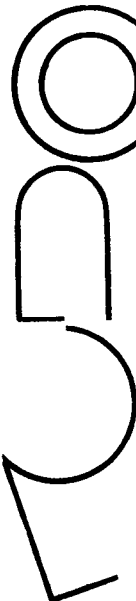
他方、転勤とか退官などで当該ポストが空くと、当該教官の専門分野の専門図書の購入はほとんどストップする可能性がある。さらに、学際的な文献なども、関心のある教官がいない限り、購入されない可能性がある。

要するに、現状では、学生用の専門図書を収集するには、一律配分の学生用図書費及び教官の研究費からは多くを期待することはできない。学生は、授業科目の学習、研究、各種国家試験及び就職の準備のために種々の専門分野の勉強をしなければならない。そのために必要な専門図書がバランスよく図書館に備え付けられていなければ、図書館の利用価値が減少し、図書館の役割そのものが問われかねない。

## 3 若干の提言

現状を改善するための一歩として、①全学的に各教官及び学生を対象に、学生用図書の状況についてアンケートを実施すること、②各学部は学生用図書をどのような方法でどの規模の収書をしているかを調査すること、③各教官が一律配分の学生用図書購入書類を提出する際には2万円の予算枠外であっても必要と思われる学生用専門書をすべて記入させることによって購入できない規模を明らかにすること、④文部省配分の学生用図書費の大幅増額が期待できれば、学部レベルで教官の研究費から学生用専門図書購入費として共通費を設け、学部レベルで計画的に収集する方法を検討することなどが必要であろう。

（かみやま・としお 法学部教授）



# 辞書類の整備・充実を望む!

瀬田 幸人

## 1 言語辞書類の現状

もう6、7年も前のことになると思うが、3人のナイジェリアからの留学生と知り合う機会があった。彼らとはその後、彼らが大学を卒業して日本を去るまでの数年間の付き合いとなった。鳥取の私の田舎で一緒に魚釣りをして楽しんだことは、今では懐かしい思い出である。

さて、アフリカ西部に位置する彼らの母国ナイジェリアは、公用語は英語であるが、母語としてはハウサ語やイボ語など400以上もの言語が話されている。彼らの母語は、言語人口が1000万人を越えるヨルバ語であった。さっそくどのような言語であるのか中央図書館に行って調べてみようとした。ヨルバ語の辞書は、幸運にも1冊だけあることはあった。しかし、英語で書かれた古いものということもあり、ほとんど参考にならなかったことを覚えている。

中央図書館に行けば、世界中の主要言語の辞書は一通り揃っていて、いつでも手に取って参照できるものと思っている人も多いかもしれない。しかし、残念ながら現状はそうではない。

実際に言語辞書類の棚を見た人ならだれでも、さまざまな言語辞書がばらばらに購入されて並べられているという印象を持つことは免れないであろう。例えば、アフリカの諸言語を取り上げてみても、確かにケニアなどの公用語であるスワヒリ語の辞書は比較的揃っているが、800万人以上もの言語人口を持つアムハラ語(エチオピア)やギニア、セネガル、ニジェールなど多くの国々で使用されているフラ語の辞書は1冊も見当たらない。

ヨーロッパにしても、スウェーデン語やデンマーク語の辞書はよく整っているが、ブルガリア語の辞書は1冊もないし、ポーランド語の辞書はかろうじてポケット版が1冊置いてあるだけである。アジアの諸言語にしてもこれと似たり寄ったりの状況である。他にも例を挙げれば

きりがないが、上で挙げた例だけでも言語辞書類の現状を認識して頂けたことと思う。

## 2 文部省配当図書費の有効利用

辞書類を充実させるためには、図書費を増額することが必要であることはいうまでもない。

しかし、図書費の大部分が教官研究費を振り替えたものであるという現状では、図書費の増額にはなかなか厄介な問題が絡んでくる。やはり、神立春樹氏(『楷』No.10,1990、その他)も言及しておられるように、文部省から配当される経費(例年2千数百万円程度)を有効に利用する方法を最初に検討すべきであろう。

現在、辞書類に充てられる費用は、「参考図書」という項目に区分され各学部・学科へと細かく配分されている。しかし、このような状況では、1つの学科(研究室)に配分される参考図書の費用は、場合によっては数万円という極めて少ない額になってしまう。そこで、参考図書の費用については各学部・学科に細分化しないで、全額を図書館予算として取っておくことを提案したい。

## 3 選書の方針と担当組織の改善

参考図書の費用を図書館予算として確保すれば、計画的な用途の道は開けるとはいえ、辞書類の選書が各学部・学科にいわば、ばらばらに依頼されている現状では、言語辞書類の体系的なコレクションはとうてい望めそうもない。

計画的で体系的な選書は、やはり何といても、専門性を生かした図書館職員の手によって初めて可能になると思われる。他大学に比べて職員数が少ないということを承知したうえで、言語辞書コレクションの選書は、図書館員が中心になって行うべきであることを敢えて提案したい。

「世界各国の言語辞典を揃えて、図書館に行けば言葉についての調査はすべてOKであるとしてみたい。」という矢野光雄氏(『楷』No.10,1990)の願いは、その気にさえなればいつでも叶えられるわれわれの願いでもある。

(せた・ゆきと 教養部助教授)

# 留学生センターからの提案

齋藤 美智子

## 1 はじめに

留学生センターは外国人留学生の日本語・日本事情教育及び生活指導、日本人学生の留学相談を行い、岡山大学の国際交流推進の一端を担っている。本号のテーマである“蔵書をつくる”について、留学生及び留学生教育の視点から概要を述べてみたいと思う。センターとしての図書室を持ち得ていない現況からも、大学中央図書館に対する期待は大きい。

留学生（380名 '94.2現在）は、研究生、学部生、日本語研修生（大学院等の専門研究に入る前の予備教育として6カ月間日本語を学習する）に大別されるが、最近行った研修生の図書館利用のアンケート調査を見ても、最初のオリエンテーションで図書館を案内した後の6カ月に、意外なほど多く図書館に足を運んでいることがわかった。また“図書館で何をしたいか”という質問に対する回答の調査結果で、最も多かった次の三つは、センターの図書館の役割への期待と重なり合うものであるし、また“蔵書をつくる”ことと、密接な関係があると思われるので、図書館の役割期待にそって、今号のテーマを述べてみたい。

## 2 図書館の役割期待

### ①日本語及び専門研究分野の本を得る所

留学生の図書館への主たる期待は、日本語及び各専門領域の蔵書がより多くみられること、また近年の電子メディア等の発達により、蔵書インフォメーション・サービスが受けられることにあるが、ここでは日本語・日本事情教育の書籍について述べてみたい。現在日本語教育関係の書籍は、800番台に言語関係の書籍とともにあるが、種類、量ともに少ない。教科書を含めた教材及び各国語の辞書類、また日本語教育のバックグラウンドとなる日本語教育史、教授法等の研究書、各大学の日本語教育機関の紀要もぜひ蔵書としておきたい。できれば書棚に独

立した日本語教育（留学生）コーナーが設けられると、本を探しにくい留学生も、ずっと利用しやすくなると思う。

### ②学習する場として利用するところ

本をみたり、借りたりするだけでなく、図書館でレポートや論文を書く場所として利用したいという希望も多い。また日本語の教材及び日本事情の教材には、テープ、ビデオ、写真、CD-ROMなど種類が多いが、これらの教材とそれを利用するための施設の充実も望まれる。現在も図書館内にビデオコーナー、L.L.ルームが設置されているが、貸出しがしにくいものなので、教材リストから希望教材を選んで、すぐに利用できるように工夫されたシステムと、利用場所としてのコーナーがあると、教材がもっと活かされるのではないか。

### ③文化を感じに行く所

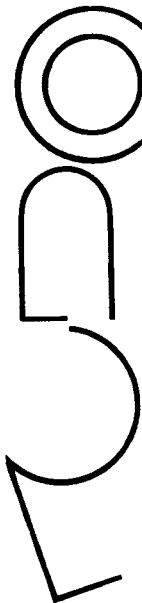
大学図書館であってもアメニティとしての要素、文化センターとしての要素が求められていると思う。図書館で、日本あるいは自国を含めた諸外国の新聞、雑誌などをゆっくり見て、文化を吸収したいという希望も多い。雑誌は定期刊行物なので、図書館で購入する場合、むずかしい問題もあるようだが、近辺の読める施設のインフォメーション・サービスが受けられると広い意味での図書館の“蔵書”になると思う。日本語・日本事情教育の分野では異文化間交流、国際交流の雑誌、定期刊行物を揃えて置きたい。

## 3 おわりに

研修生のオリエンテーションでの図書館訪問の印象は概ね良いものだったが、専門及び日本語関係の本が少ないという意見がみられた。

今後、研究留学生と学部留学生及び日本人学生の留学に関するアンケート調査も実施したいと思っている。また、留学生の専門研究、日本語学習、文化吸収のニーズ、日本人学生の留学情報のニーズに応える蔵書づくりのために、基本方針から具体的な選書まで、留学生センターと図書館との協議体制をぜひつくっていききたいと思う。

（さいとう・みちこ 留学生センター助教授）



# 学生用図書のニーズと役割

内田 和子

『中央図書館利用の手引き』によれば、学生用図書は「学生が授業の理解を深め、あるいは一般教養、専門的知識を高めるために適切と思われる図書」とある。この趣旨に沿って、私も図書の選定に携わってきたのであるが、その際、中長期的な計画や他学部の同専攻分野教官との連携、学生の要望などを十分に考慮しないでやってきたという感否めず、反省している。そこで、今回の図書館からの原稿依頼を機会に、若干の学生や教官から意見を伺い、学生用図書の実態と合わせて、主として利用者のニーズの点から意見を述べてみたい。

## 土地や人々に関する情報の提供

地理学の学生用図書として利用者が望む第一の点は、変動の激しい世界情勢の中で、地名や都市などの位置、人や産業などに関する情報を得ることであった。こうした要求に十分応えることは不可能であって、テレビや雑誌などを越える最新情報は提供できない。そこで、可能な範囲の学生用図書として考えてみると、問題となるのは適切な地図帳がないことである。もちろん書庫の奥には、ディルケ・アトラスなどの立派な地図帳があるが、これらは大型で重く、日本語表記もない。そのため、書庫まで入って重い地図帳を見るには大決断を要する。しかし、最近ではこのレベルまではいかないまでも、小・中・高校生が使用する地図帳よりは詳細でハンディなものが刊行されているので、日本と世界の2種類の地図帳を揃えたいものである。

このことに関連して、現在の高校の教育課程では地理は必修ではなく、履修者も年々減少している。高校段階で地理を学ばずに大学へ入学する学生がかなり多い。そのため、地図帳といえば中学校で使用した簡便なものしかなく、少し細かな地名や主題図を見るには不便である。その意味でも、手軽に見られて高校レベ

ルより詳細な地図帳が必要であろう。また、留学生も多いので、地名や位置を調べる目的の他に、多くの主題図が載せられ、日本の概要がわかる英文版の日本地図帳も備えられると便利である。

次に必要なものは統計類である。国連統計年鑑などの大きな年鑑は別に揃えられているが、地図帳と同様に、大型の年鑑ほどのデータは網羅していないまでも概要は把握できる手軽な統計要覧があるとよい。統計は定期的に入れ替える必要がある。その意味でも高価な年鑑ではなく、安価な要覧程度のものが望ましい。これに関連して、国旗の写真とその由来などが載ったユネスコ選書の1冊も重宝である。

## 地理学への誘い

第二点は、地理学の概要をとらえたい、あるいは特定の地理学的課題に答えるための文献ガイド的要望である。自然・人文・社会の3科学分野にまたがる地理学の概観を見ることは至難の技で、現に地理学の書物は図書館の分類上、地理、経済学、理学、農学などの多くの書架に分散している。したがって、このニーズに応えることも難しいのであるが、せめて系統別に地理学の分野が概説された地理学全集は欠ける巻なく、完全に1セット揃えたいものである。そして、この全集も10年に一度くらいは更新していきたい。この他、辞典類であるが、関連分野が多いのですべては網羅できないものの、地理学辞典と人文地理学辞典の他に地形学辞典、気候学辞典、地図学辞典などは備えたいと願っている。

さらに、教官の著書や報告書は一部ずつ寄贈して、学生用図書の中にコーナーを設けることも本学の教官の仕事を通して地理学への理解を深める点で有意義かもしれない。

しかし、学生用図書の予算はわずかである以上、それを有効に利用するには、前述のように、学問分野ごとの中長期的な展望に基づいた整備計画の策定と、学部を越えた教官相互の連携と調整が必要であろう。

(うちだ・かずこ 文学部助教授)

# よろこびとかなしみと

渡邊 護

二四六五〇〇・246500。上の数字がいま私の胸を重く塞いでいる。あまつさえ下三桁め、五の前に「、」などが入れば、さらに私の心は強い悲しみに満たされる。二四六、五〇〇。この数字の意味を、多くの人は知らないだろうと思う。新增補版『校本万葉集』（全18冊・別冊3、岩波書店）の総定価24万6500円である。数字の意味を多くの人が知らないだろうと言ったのは、岩波書店から送られてきたリーフレットには、各冊の定価が示されるのみで総定価がないからである。因に各冊の定価は、7ポイントの小字で見開き左下隅にまことにひそやかに示されている。私の悲しみは、この各冊定価をおぼつかない手つきで合計してみた直後に生まれたものであった。

『校本万葉集』は大正末年、12年の編纂の歳月を費やして刊行（和装本25冊）。正宗敦夫『万葉集総索引』と並んで万葉学徒必携の一書である。その後の『校本万葉集』の歩みを辿れば、昭和6～7年に「尼崎本」（昭和初年出現）を盛り込んで増補版刊行。昭和54～57年、写本数本、断簡類を含んで6冊追加の新增補版全17冊が刊行された。私個人はそれを持っている。

「学者は貧乏である」。二四六五〇〇の数字と上の言葉はないまざり、いよいよ現在の私は悲嘆に打ちのめされるのである。

上の言葉は、新增補版全17冊が刊行された時の、我が師伊藤博の嘆きと怒りの言である。先生はそれ以前の10冊本の『校本万葉集』をお持ちだった。大学の図書館、研究室に備えられているのもその10冊本であった。伊藤先生の怒りの原因は、岩波書店が全17冊一括の予約申し込みの方法を取り、追加増補7冊分の分売を許さなかった点にあった。新增補版全17冊を入手しようとするれば、かつて血の出るような思いをして購入した前10冊本は重複、お蔵入りの運命となるのである。

「学者は貧乏である」の言は、師の声とともに私の胸にいま、かなしいほどにこだましている。

今回の『校本万葉集』の増補は、昨年末（12月26日）、「万葉集『幻の定家本』全20巻」と銘打たれて新聞発表された、「広瀬本」の出現によっている。『校本万葉集』新增補版の刊行は既にその新聞記事で予告されていた。リーフレットにある予約申し込み規定〔頒布方法〕には、前回と同様全18冊・別冊3予約申し込み者へのみの頒布と分売の拒否が示されている。ただし、今回は但し書きがある（これも7ポイントの小字）。「但し、今回追加した4冊（第18冊・別冊3）のみの予約も承ります。」

まことに有り難い上の措置だった。ところが、よくよく読んでみると〔今回の増補・修訂について〕のところには、「既往の17冊全体にわたりさらに修正補訂した」とある。結局、万葉集の専門学徒は、今回の全巻を改めて購入せざるをえない。それを暗示するごとく、同リーフレットの〔図書館のご案内〕には、「図書館・研究室におかれましては、今回の新版を全巻お揃えになることをお勧めします」とある。

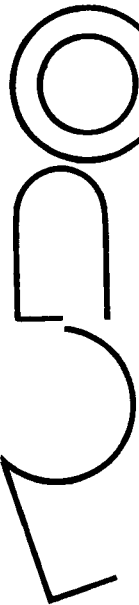
まず、私個人の二四六五〇〇の悲しみ。次にかつての伊藤先生の嘆きを尻目に、喜々として校費で購入した学生のための全17冊本のゆくえと、貧しい講座費における二四六五〇〇の悲しみ。おそらく前17冊本は、『校本万葉集』の歴史の一端を示す資料として図書館の書庫の片隅に眠ることになるだろう。さらに学生のためを思えば図書館のオープン用としてもう1セットいる。できれば全部で最低3セットはほしい。

私の中で苦しいやりくりが始まる。

そういえば、「学生用一般図書」の購入希望書が例年各講座へと回る。それが使えないものか。しかし、『校本万葉集』のレベルともなれば、「一般」の一語に抵触してしまうだろう。これはだめか。さらに悲しみは尽きない。

この度の『校本万葉集』新增補版刊行は、まさによろこびとかなしみと、である。

（わたなべ・まもる 文学部教授）





## OLIVE バージョンアップ

パソコンによる図書館利用案内システム「OLIVE」のハードウェアが、昨年度末に大幅にバージョンアップされました。これで、画面の切り替えやプリントアウトなどがグッとスピードアップされより使いやすくなります。

また、すべてのパソコンは学内LANと接続される予定ですので、今後は、利用案内はもとよりさまざまな情報の提供をネットワーク経由で行うことが容易にできるようになります。

画像編集等各種のソフトウェアも準備できましたので、新年度は「OLIVE」の発展が更に期待されます。

3月にはAVインフォメーションのチームリーダー山田敦雑誌係長が、長崎大学、上越教育大学の職員研修会に招かれ、Macを使って「OLIVE」を紹介しました。

今後、図書館からなにをどのように発信していくかが課題となりますが、利用案内システムだけでなく、データベースの作成についても検討されています。

## 電子掲示板システムを設置

この度図書館のエントランスホールに電子掲示板を設置しました。この電子掲示板は、ワープロ等で作成した文書や図を直接拡大して掲示できるもので、掲示内容や掲示する時間を自動的にセットすることができます。これにより、図書館からのいろいろなお知らせを必要な時に必要な時間だけ簡単に掲示できるようになり、きめの細かな案内が可能になりました。

## CD-ROMファイルサーバーシステムを導入

新年度から、図書館2階のレファレンスフロアでスタンドアロンのパソコンで利用されていたCD-ROMが、学内LANを介してパソコンで利用できるようになります。

利用可能なデータベースは、MEDLINE(最近6年分)、ERIC、MLA、PsycLIT、CCOD、利用可能なパソコンの機種は、NEC9801、IBM/PC(いずれも互換機を含む)、Apple Macintoshの3種類です。いずれも、検索に必要なハードやソフトは不要で、学内LANに接続されていれば利用可能です。また、電話回線でも利用できますので、LANが行き届かないところからも検索できます。

図書館では2階のCD-ROM用パソコンを従来の2台から5台に増やして検索コーナーを充実させましたので、これまでどおり図書館に来て検索することもできます。

## オンライン情報検索用パソコンを更新

図書館2階のレファレンスフロアで行っているDIALOGやJOISのオンライン情報検索用のパソコンが、Macintosh Quadra 840AVに更新されました。今後は学内LANを通してNACSIS経由でJOISを利用することができますので、JOISのユーザはアカデミック・ディスカウントを受けることができます。また接続通信のソフトが強力なものになりましたので、検索結果のダウンロードや検索画面のバックスクロールなどの便利な機能が使えるようになり、より効率的な検索が可能になりました。

## 中央図書館入退館システムを導入

平成5年度末に導入されたブックディテクションシステムにより、図書の無断持出しの防止を図ることができるようになり、従来、入館時に手荷物がある場合、ロッカーを使用し、持ち込み図書にはカードを挿入するなど、ユーザの不便が解消されることとなります。図書館では当面、試行期間を設けて実施する予定です。

## 中央図書館 身障者用施設の改善

身障者のユーザが図書館を活用できるように平成5年度に施設の改善が行われ、玄関自動ドアの拡幅工事とスロープなど周辺施設、及び1階トイレの改修工事が行われました。平成6年度は更にエレベーターの設置が認められており、車椅子での利用ができるように改善される予定です。

## 軌道に乗りはじめた STNアカデミック・ディスカントの利用

平成5年度からCAの商用オンライン情報検索について、図書館の代行検索をやめ、研究者のダイレクト検索に対しアカデミック・ディスカント（岡山大の場合、8割）を受けることのできるSTN利用への切り替えをお願いしてきました。

幸い、ユーザのご理解、ご協力を得て、次第にハードの整備、パスワードの取得がひろがり昨年度末現在で農学部、理学部、教養部を中心に、津島地区の関係各部局で活用されるようになりました。『楳』前号でユーザの教員の方にSTNの利用の実感を書いていただいておりますが、STNのアカデミック・ディスカントを受け手続き等は、図書館がお世話をしておりますので、一層の普及が期待されています。

## ますます活用されるマイクロフィルム

— 池田家文庫藩政史料 —

池田家文庫藩政史料マイクロ化事業の完成により、平成5年度から全2,486リールのマイクロフィルムの利用提供がスタートしました。

『楳』前号で前半期の利用状況をお知らせしましたが、後半期も盛況で、年間の利用者数は延271人、リールの稼働率は51%、1,276リール、コピーの利用は21,526枚に達しました。

## 資源生物科学研究所分館新築工事始まる

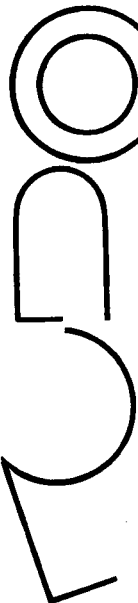
大正10年以来増改築を経たとはいえ当時の面影を残す木造平屋建ての資生研分館が、この度『史料館』として生まれ変わることになりました。半年あまりの期間、学内を始め全国の利用者の皆様に多大のご迷惑をおかけします。

新しい建物は近代的な鉄筋3階建て(651㎡)で、1階に新着雑誌とメインカウンター、2階に利用の多い主要雑誌のバックナンバーを集中化、3階には、今回学内LANが倉敷地区に延長されることもあり、ワークステーションが設置されます。

また、『史料館』機能としては、1階に史料展示コーナー、3階にバッファー文庫・大原漢籍文庫・大原農書文庫のための本格的な貴重書庫と専用閲覧室が設置される予定です。

建物の完成予定は平成6年10月です。工事期間中「書庫」は閉鎖しますので、書庫内の図書・雑誌・貴重書の利用はできません。

図書館（仮事務所、閲覧室）は管理棟2階に移転しました。ここで、1993年度分以降の購入雑誌と新着雑誌、学生用図書・参考図書の閲覧ができます。また、完成までの期間に限り各研究室に必要な図書、雑誌の特別貸出をしていますが、各研究室のご協力により、これも利用可能になっており、利用できる雑誌のリストを作成配布しています。



## 会議 ㊦

### ◆ 学 外

- 11.18 平成5年度学術情報センターシンポジウム  
(於神戸国際会議場)  
・学術情報ネットワークの役割とその整備  
について、その他
- 1.19~1.20 平成5年度国立大学附属図書館事務  
部長会議(於メルパルクYOKOHAMA)  
・外国雑誌の購入方法について  
・大学図書館の広報活動について  
・図書館の自己点検・評価の公表について  
・図書館サービスにおける学内LANの利用  
状況について、その他
- 12.3 平成5年度第3回附属図書館広報委員会  
・館報「楷」No.19の編集について  
・ライブラリー・リフレッシュについて、  
その他
- 12.15 平成5年度第2回附属図書館運営委員会  
・平成7年度歳出概算要求事項について  
・平成7年度国立学校施設整備費概算要求  
事項について、その他
- 12.16 平成5年度第4回附属図書館広報委員会
- 1.12 平成5年度第5回附属図書館広報委員会
- 2.2 平成6年度全国共同利用図書資料(大型コ  
レクション)収集計画に関する小委員会  
・平成6年度全国共同利用図書資料(大型  
コレクション)の選定について
- 3.7 平成5年度第6回附属図書館広報委員会  
・館報「楷」No.19の編集について

### ◆ 学 内

- 11.5 平成5年度第2回附属図書館資料選択委員  
会
- 1.19 池田家文庫等特殊文庫委員会  
・平成5年度図書館特別業務経費の用途に  
ついて、その他

## 研修 ㊦

- ・平成5年度中国・四国地区国立学校事務電算化  
担当職員研修会  
参加者 大元利彦(11.8~11.12)
- ・平成5年度総合目録データベース実務研修  
参加者 三浦葉子(11.8~12.3)

## 編集委から ㊦

「<sup>つちよ</sup>糴」季節がやってきた。遙か中国大陸から  
黄砂が、そよ風に乗って日本の春を運んで来てく  
れる。予報では当地、岡山の桜の開花は3月30日  
頃とか。本号が出る頃は、津島キャンパスは花と  
新緑に包まれ、新生で活気に充ちあふれている  
ことであろう。

うれしいニュースがある。お気付きの方も多い  
と思われるが、図書館裏手の一角で埋蔵文化財の  
発掘調査が始まった。新図書館建設の前ぶれであ  
る。長い間の悲願であった増築が一日も早く実現  
することを共に祈りたい。

それにしても現在の図書館の蔵書構成はあまり  
にも貧弱であると思う。本号ではこの現状を打開  
し、利用者にとってもっと魅力ある図書館にする  
方策について、いくつかの貴重なご提言をいただ  
いた。厚く御礼を申し上げる。これらのご提言を  
もとに企画的な取書システムの構築を急がねばな  
らない。

新年度中には自動入退館システムが稼働する。  
また学内LAN OUNet網を利用したCD-ROMサービ  
スも開始する予定である。積極的な活用を期待し  
たい。(事務部長 森岡祐二)

岡山大学附属図書館報「楷」 No.19 平成6年4月25日  
発行人 森岡祐二 編集 広報委員会 表紙デザイン・レイアウト 清水國夫  
岡山大学附属図書館発行 〒700 岡山市津島中3丁目1-1 電話086-252-1111